

# アンドレ・ブルトンにおける シュルレアリスムとグノーシス主義

Surrealism and Gnosticism in André BRETON

加藤 彰彦

Akihiko KATO

## 【要旨】

アンドレ・ブルトンは最後のシュルレアリスム宣言として捉えられる『吃水部におけるシュルレアリスム宣言』の結論部分において、シュルレアリスムとグノーシス主義の目指すところが一致していることを指摘している。確かにシュルレアリスムの神秘主義的なところもブルトンのテキストから明らかに指摘されるのであるが、シュルレアリスムとグノーシス主義が大きく分かれるところは、前者が現世において特に愛によって幸せを獲得しようとしているのに対して、後者は物質的世界＝肉体的世界を悪の世界として否定していることにある。またブルトンは階層秩序的二項対立を否定するのに対して、グノーシス主義は肉体と精神のプラトンの二項対立をその根本に据えているのである。しかしながらブルトンの目指す超現実とは実体を欠いた記号空間にすぎないこと、またブルトンが求めるシュルレアリスムの精神の一点とは、まさにグノーシス主義における救済の如く、身体内で見出す真の知であることから、シュルレアリスムとグノーシス主義は同じ方向を目指していると理解されるのである。

## 【キーワード】

アンドレ・ブルトン シュルレアリスム グノーシス主義 超現実  
シュルレアリスムの精神の一点

## 序章

アンドレ・ブルトンは1924年に『シュルレアリスム宣言』を刊行し、以後同種の宣言を発表、晩年の1965年には『シュルレアリスム宣言集』という題名を冠して、ジャン・ジャック・ポヴェール書店からそれらの宣言集を発表している。この中には自動記述の作品である『溶ける魚』や『女見者への手紙』も含まれているのであるが、おおよそはブルトンのシュルレアリスムについての理論の変遷を見ることが出来るものである。そしてこの「宣言集」の最後に当たるものが1953年に発表された『吃水部におけるシュルレアリスム』で、題名としてシュルレアリスム宣言という表記はないのであるが、実質的にはそれまでの宣言集に続く「第四宣言」として捉えられるものである。この「第四宣言」、この後に「第五宣言」は最早存在しないこと、ブルトンがこの「第四宣言」までをまとめて「シュルレアリスム宣言集」と銘打って公表したことからも、ブルトンにとっての最終的な宣言と捉えられるものである。この宣言のまさに最後の結論部分に書かれているのは以下のようなものである。「人が自分のために作った梯子を降りるにつれて次第に、その願望や苦悩を感知することができなくなる他の存在との関連で、自らを取り巻くものの識別に自分自身から知るわずかなものを役立たせ得るのはただ全くの謙

虚さにおいてのみである。そのため、人が自由に使えるものとして持っている大いなる手段は詩的（下線原文）直観である。結局シュルレアリスムにおいて解放されたこれは、ありふれた全ての形式に同化するだけでなく大胆にも新しい形式の創造者たらんと望むのである——つまり明示されているにせよされていないにせよ、世界のあらゆる構造を包含するのに都合のよい立場にいるということである。そのみが、《永遠の神秘の中で目に見えないが存在が明白な》超感覚的な〔現実〕の認識として、〔グノーシス〕に至る道に戻す筋道を我々に与えるのである。」（PIV pp.24-25）<sup>1)</sup>

ここにおいてシュルレアリスムの詩的直観とグノーシス主義の認識とが結び合わされる形でブルトンによって提示されたのである。このシュルレアリスムとグノーシス主義の関連について考察するのが本論考の目的である。そのため前提としてまずグノーシス主義についてその概要をまとめておこう。グノーシスとは何かであるが、その定義については1966年にメッシーナで行なわれた「グノーシス主義の起源に関する国際学会」による提言というものがある。それは三つに要約することができて、①反宇宙的二元論、②人間の内部に「神的花火」「本来的自己」が成立するという確信、③人間に自己の本質を認識させる救済啓示者の存在ということになる。①の反宇宙的二元論の「反宇宙的」とは何かということであるが、現在我々が生きているこの世界というものは否定的な秩序が存在していて、まさに悪の世界であるため、我々としてはこの世界を受け入れることはできないし認めることもできないとする立場である。この現実が悪であるそもそもの原因は、この世界が物質で構成されていて、物質で造られた肉体も悪ということになる。ここから善悪と物質、精神の二元論が成立したのである。つまり物質と対立する霊もしくはイデアが真の存在であり世界であるということだ。この精神と肉体の二元論については後で述べることになるが、プラトン哲学の影響を見て取ることができる。つまり肉体を有する我々の中にある本来的自己を肉体という悪の存在の軛から解き放ち、正しい認識によって至高の存在へと回帰することが、③で示されるグノーシス主義思想における救済ということになる。ここで示されている認識は単なる知識の獲得というようなものではなく、知的直観というようなもので、まさに神秘思想と言えるのであるが、ブルトン自身『シュルレアリスム第二宣言』において「私はシュルレアリスムの深く、真の神秘化を求める。」（PI p.821 全て大文字）と述べていることとも符合するのである。このようにグノーシス主義についての理解を得るならば、ブルトンがシュルレアリスムにおいて何を求めていたのか明らかとなってくるであろう。確かにブルトンは『シュルレアリスム宣言』において現実世界の否定を標榜し、そこから抜け出す手段として想像力に訴えることを提案するのだ。ところがここで考えられている想像力とは現実主義的なものであって、つまりはこの現実の範囲内でよりよい生活を求めるという形で提示されるのだ。そのため現状としての想像力は次のようなものである。「しかし人がそんなに遠くに行けないだろうというのも本当で、距離だけが問題ではないのだ。脅威が積み重なり、人は譲歩し、獲得した領土の一部を放棄する。限界を認めていなかったこの想像力、人がそれに恣意的な実利の法則に従うしか最早発揮されることを認めない。それはこの劣った役割を長い間引き受けることができず、二十年目の頃に、普通、人間を光明のない運命に委ねることを選ぶのだ。」（PI pp.311-312）

つまり現状はこうだが、もっと別な生活、別の人生があったのではないかという選択判断の問題なのである。だからこそ「自分に起こるとか起こり得ることから、この出来事を似たようなたくさんある出来事、自分が参加しなかった出来事、やり損なった（下線原文）出来事に関連させることしか思い浮かべないだろう。」（PI p.312）

つまり選ばれる対象としての現実には常に既に存在していて、その中から言い換えるなら現実には存在している範囲内でしか選択できないということである。場合によっては別の生活、別の人生があり得たのではないかという時に駆使されるのが、我々の言う想像力なのである。ところがブルトンの言う想像力はその域を越えていて、その意味では現実主義的ではないのである。ブルトンの主張はこうである。「我々が受け継いでいるとても多くの不興の中で、精神の最大の自由（下線原文）が我々に残されていることは確かに認めなければならない。（中略）唯一想像力だけがあり得る（下線原文）ことを我々に説明するわけで、恐ろしい禁忌を少し解除するにはそれで充分である。」（PI p.312）

狂気をも恐れぬブルトンではあるが、ここで問題になってくるのは、想像力という名の精神の自由を認めるとして、それでは残された肉体はどうなるのかということである。フェルディナン・アルキエが『シュルレアリスムの哲学』において指摘しているように、ブルトンの考えには肉体をも含めた現実主義的なところがある。「ブルトンが幸福を見出す、そして愛によってそれを見出したいと思うのは、しかしながらこの世界からであり、そしてそれのみにおいてである。」（PS p.19）

ここで指摘されている「愛」についてだが、ブルトンは『シュルレアリスム第二宣言』において、愛の問題に触れて次のように書いている。「悪ふざけする人が可能なあらゆる拡大、あらゆる墮落を被らせようと工夫を凝らしたこの愛（下線原文）という言葉（子の親を思う愛、神への愛、祖国愛、等々）であるが、ここではそれをこの人間の魂と肉体である〈魂と肉体において〉真実の、我々の真実（下線原文）の絶対的な認識に基づいた、人間への全面的愛着という厳密で脅迫的な意味に戻していることは言うまでもない。」（PI p.823）

つまりここにあるのはグノーシス主義を標榜するとはいえ、肉体を否定したりこの世界を否定したりするわけではないのだ。むしろ全面的肯定といった趣きさえある。確かにシュルレアリスム＝グノーシス主義というわけではないのであるから、一部相容れない箇所が出てきたところで何の不思議もない。しかしこの肉体の否定というまさにグノーシス主義の根幹にある考えと、うまくかみ合わない。更に言うなら、グノーシス主義に認められる肉体と霊性（精神）の二元論というプラトニックな考えも、ブルトンが『シュルレアリスム第二宣言』で明らかにしているように、つまり「人間の側からのあらゆる奇異な動揺を偽善的に未然に防ぐことに向けられた古くからの二律背反の作為的な性格にあらゆる手段で被害を与え是非ともそれを認識させることが、知的見地からすれば問題であったし、今尚問題であるのだ」（PI p.781）というシュルレアリスムの目的と根本的に相容れないものである。確かにブルトンはシュルレアリスムを展開する上においてグノーシス主義を学問的に追求しているというわけではないから、理論的な整合性については厳密であることを必要としないとも考えられる。ただグノーシス主義については、我々がブルトンの考えはグノーシス的であると指摘しているわけではな

く、まさにブルトン自身によって提示されているわけで、その整合性を明らかにするのが本論考の辿るべき道なのである。

## 第一部 現実に代わるものとしての超現実

### 第一章 現実とは違うもう一つの世界

現実を否定することから必然的に生じてくる問題は、それではどこに生存の場を求めるのかということになる。まずはシャルル・ボードレーの『巴里の憂鬱』を見てみよう。ここに収録されている散文詩の一つである「どこへでも此世の外へ」には次のように書かれている。「私が存在していないところでは私は常に気分がいいだろうと私には思われるし、この移転の問題は私が絶えず私の魂と議論している一つである。」(SP p.205)

ここで対象となっているのは、フランスのパリを離れて外国に行く考えである。まずはポルトガルリスボン、次にオランダのロッテルダムといった具合である。ここで選択の基準となっているのが、気候がいいとか風景がいいとか専ら環境面についてである。しかしそれで満足というわけにはいかない。そこで「仮にそういう事情であるなら、[死]の相似である国々に向けて逃げよう。」(SP p.206)とか「更に人生から遠く離れて、もし可能なら、極地に身を落ち着けよう。」(SP p.206)とかいった提案にもなってくる。これで十分かというところではなく、結局のところ最後は次のように締め括られることになる。「結局、私の魂は爆発する、そして思慮深く私に強く訴える、くどこでも構わない!どこでもいい!それがこの世の外でありさえすれば!」(SP p.207)

いかに環境面などを考慮し快適さを追求しても、そこが現実である限り満足のいく場所とはならないということである。つまり問題となっているのは物質面における快適さではなく、自らの主体を確立させてくれるような大文字の他者の存在である。ブルトンが『ナジャ』の第一部で言及しているように、自分がいかなる存在であって何をするためにこの世にいるのかを明らかにしようとする時、そこに求められているものは自分の存在の意味と自分自身が存在するこの現実との整合性を保証してくれる大文字の他者であり、仮にこの現実において整合性を見出せないとなると、もう一つの世界を措定する他ないのである。この点についてヘーゲルは宗教と結びつけて論じていて、アレクサンドル・コジェーヴは『ヘーゲル読解入門』において次のように述べている。「あらゆる[宗教]の、あらゆる[神-学]の基礎であるのは、従って結局のところ現実の[世界]を受け入れることの——もともとは奴隷の——拒否であり、俗界の外にある理想(下線原文)に逃げ込みたいという欲望である。一方では[世界]と[世界-内-人間]の間の、もう一方では[神]と[彼岸]の間の二元論の基礎にあるのは、私が私自身について抱いている観念的イメージである理想(下線原文)と、私が存在している現実(下線原文)との間の二元論である。」(LH p.211)

ここにおいて現実に代わる場所とは、現実におけるここではないどこかではなく、観念的なものである。この場合最早場所とは言えないだろう。確かに現実ではないのであるから、想像の産物であり幻想であるとも言えるのであるが、少なくとも主体があり対象がありそれらの関係が成立することを期待するならば、それが成立するための場所が必要だということになる。

ドゥルーズ＝ガタリは『アンチ・オイディプス』において、イレマン・ロセを引用する形で次のように書いている。「世界は、次のような対象は欲望が欠けているという道筋を利用して、それが何であれ他の世界と二重になって見える。従って世界は全ての対象を含んでいるわけではなく、少なくとも一つ、欲望の対象が欠けている。従って（世界に欠けている）欲望の鍵を含んでいる別の世界が存在するのだ。」（AO p.33）

このように考えるならば、ブルトンにとって現実に代わるもう一つの場所とは超現実に他ならない。ただ我々にとって問題であるのは、ブルトンが超現実を一つのイメージとして提示していないことにあるのだ。ブルトンが『シュルレアリスム宣言』において書いている「見かけは非常に相反しているが、夢と現実ということになる、これらの二つの状態が、一種の絶対的現実、仮にこのように言い得るのなら、超現実（下線原文）に、将来変化することを私は信じている。」（PI p.319）という記述によって、手掛かりを得るにすぎないのだ。超現実とは現実と夢との融合といった形で捉えられることになるのであろうが、言い方を換えれば人工的な夢ということで、夢に近い夢のような世界という理解が成立するように思われる。それはブルトンが『通底器』においてエルヴェ・サンード二侯爵の『夢とその操向法——実践的考察』を引き合いに出し、夢をいかに自由に思いのままに操ることができないかという点に思考を巡らせているからである。実際ブルトンは次のように書いているのだ。「ユイスマンズの『さかしま』の主人公よりはるかに一層幸福であったエルヴェは、社会的見地からすれば、あまりに恵まれ過ぎていたために、そもそも何かから逃れようと本当に試みるなどあるはずもないと、私には思われるのだが、目立った混乱もなく、現実世界の外に、感覚的な面でデ・ゼッサントの陶酔に何ら屈することはなく、逆に、倦怠も良心の呵責ももたらすことのない一連のまじりけのない満足感を手に入れることに成功している。」（PII p.103）

ブルトンは超現実を提示するにあたって、現実の世界でもなく夢の世界でもなくそれらが融合したものであるとしているわけであるが、この『通底器』の記述を見る限り、仮に夢を自在に操ることができるのであれば、それで充分と考えていたようなところがある。もちろんそのような試みは実現できないので、現実の側から何とか夢の世界に近付けることはできないかと考えたわけである。また注目すべきは夢の世界を「現実世界の外」と表現していることで、我々の感覚からすれば夢もまた現実世界の一部を形成していると思われるのであるが、ここにおいて現実と夢とを区別する基準とはどれだけ意識的であるかということなのかもしれない。実際ブルトンはこのエルヴェ・サンード二の著書に触れて、「錯乱性の哲学の恩典によって、現実の世界と夢のそれを対立させる、私が言いたいのは互いにこれらの二つの世界を切り離し、感受性が裁き手でとどまっているので、互いの従属関係の純粋に主観的な問題とすることを目指す二項」（PII p.104）が一般にあることを指摘し、「二項間の最終的両立の可能性」（PII p.104）をこの著書に見出しているのであるが、哲学的に見てもデカルトが言うように現実と夢の厳然たる区別というものは存在し得ないということであるし、実際夢の中でこれは現実だと認識する体験はあるのであるから、現実を制御できるように夢を支配下に置きたいと考えることも可能性の一つとしてはあり得るわけだ。ブルトンは夢についての考察を重ね、現実を何とかして夢のように出来ないかと試みるわけであるが、その結果夢を自在に操ることができるようになっ

たというわけではないとしても、問題はそのことにはない。ここで注目すべきは、現実をどれだけ夢のようなものに近付けることができたかどうかではなく、現実にも夢にも、それについて記述することができるということなのである。事実ブルトンは『通底器』の後の箇所で、自らの夢の報告を試みるのである。これは「夢の精神分析的解釈」(PII p.117)のためであり、この夢の内容についての報告の後に「解説の注」(PII p.120)として夢と関連付けられるような当時の状況が報告されることになる。問題はこの記述内容の正確さとか理論的妥当性といったようなことではなく、つまり現実であれ夢であれ記述される対象として存在しているのであるが、ブルトンがその融合を目指す超現実については記述されていない、もしくは記述できないということなのだ。ロバート・A・ハインラインの『輪廻の蛇』の中にあるように、窓から見た外の世界が我々が日常的に見る現実の世界であるというわけではなく、ある意味何もなく、別の表現をすればわけのわからないものがうごめいている状態でしかないというのが真相で、我々が見ているのは錯視もしくは幻想といった表層的なものかもしれないという推測は成り立つ。しかしそのような描写すらブルトンによっては為されない。超現実とかシュルレアリスムの形容は可能だろう。しかし超現実についての描写は存在しないのだ。あるのは超現実という言葉だけであり、ここにおいて超現実とはシニフィエのないシニフィアンにすぎないという事実が存在するのだ。

## 第二章 超現実的というイメージ

超現実そのものについては何ら実体はなく要するに言葉だけであり、シニフィエなきシニフィアンであるということなのだが、この方向で論を進める前に、我々が想起し得る超現実的という表現について指摘しておきたい。『シュルレアリスム宣言』や『通底器』の記述から、超現実とは夢のような世界であり、それを睡眠時におけるものではなく人為的に可能にし、そのことによって現実をできる限り夢に近付けていく試みであることは理解できる。そのための方法として考えられたのが、まずは無意識に依拠するという前提なのである。そもそも夢とは無意識の現われなのであるから、その無意識を睡眠時ではなく覚醒時において何とか取り出し表現することができればという方法は間違っていないと思われる。ブルトンのテキストでこの点を確認しておくなら、まず『シュルレアリスム宣言』の中のシュルレアリスムの定義において、「シュルレアリスムはそれまで顧みられなかったある種の連想形式の上部の現実、夢の全能、思考の無欲な戯れの存在を信じることに基礎を置く。」(PI p.328)とし、また別の説明では「それによって口頭であれ、書面であれ、他のあらゆる方法であれ、思考の実質的機能を表現することを目的とする心的な自動現象。理性によって行使されるあらゆる制御がない時の、審美的なもしくは道徳的なあらゆる関心事以外の、思考の書き取り。」(PI p.328)と書かれている。実質的にシュルレアリスムとは自動記述のことであると理解される。この記述において無意識という言葉そのものは見受けられないが、ブルトンの無意識への信頼は、例えば『ナジャ』のナジャの物語後の第三部において、「私はもう一度無意識しか認めたくはないし、無意識しか当てるにたくはないのだ」(PI p.749)という記述で確認することができる。この自動記述によるテキストの一つとして『溶ける魚』があるが、このテキストそれ自体が超現実ではないにしても、

そこで表現されている世界は超現実的であると理解されることから、超現実的なイメージはおおよそ把握することができる。それは光に溢れた幸福感に満ちたものであって、フェルディナン・アルキエは『シュルレアリスムの哲学』において次のように指摘している。「そういうわけで、後で、愛についてのシュルレアリスムの考え方が知るはずであった充実化と不確定性がいかなるものであれ、ブルトンの探求の最初の誘因の一つは愛の中で存在していたいそして、愛によって、幸せに出遭いたいという欲望だったということがわかる。そんなわけで『溶ける魚』の雰囲気は明るさに満ちているし、人がしばしばしたように、シュルレアリスムの悲観主義を話題にするのは相変わらず間違いである。」(PS p.14)

あるいは「再び見出された楽園は日常生活の、美化された日常生活のそれではなければならない。それは、『溶ける魚』の中で、パリの、愛の部屋の中でも最も素晴らしく、最も輝く部屋に絶えず変えられたパリのような楽園である。」(PS pp.19-20)

しかしこれでは超現実であるどころか現実そのものであり、まさに現実主義的であるということにもなるだろう。ただこのような現実には存在しない。現実にはあり得なくもないということでは現実にその土台を置きながらも、現実にはあり得ない展開が見られるのだ。このような変換はまさに『ナジャ』においても見られるのであって、ブルトンがナジャと出会い逢瀬を繰り返す場所は現実にあるパリなのだ。そもそもブルトンがナジャと初めて出会う 1926 年の 10 月 4 日にしても「全く何もすることがなく非常に陰気な最近のある午後の終わりに」(PI p.683)なのだ。それでもパリはブルトンにとって何かを期待させる街であって、『ナジャ』の第一部にあたるシュルレアリスム的な挿話の中で、「ナント、恐らくパリとともに価値のある何かが私に起こり得るような気がするフランスで唯一の街」(PI p.658)と書くわけであるし、またパリの街中を行き来することについても、「実際、私の足が私を連れて行くのが、はっきりとした目的もなく、このわけのわからないデータ以外の決め手は何もなく、ほとんど常に私が赴くのが何故そこであるのか、つまりそれ(下線原文)(?)が起きるだろうというのがそこなのか私は知らない。私は、この素早い道のりで、私のまさに知らない間に、空間においても時間においても、引力の極地を私にとって構成し得るであろうものがほとんどわからないのだ。」(PI p.661, p.663)として、はっきりとした理由も根拠も見出せないでいる。ところがナジャの出現によって、ブルトンにとってのパリは一変するのだ。ブルトンは「人生は暗号文のように解読されることを望むのかもしれない。」(PI p.716)とした上で、「罌の楽園でのこの種の旅のような精神の最大の冒険を着想することは許されているのだ。」(PI p.716)と書くのである。『ナジャ』の中にはパリの様々な地名が散りばめられていて、そこは確かにブルトンがナジャとともに出かけて行った先なのであろうが、テキストの中に書き込まれることによって、テキストの中でそれらの地名が空間を形成することになるのだ。ブルトンはナジャの物語の後物語が展開された場所をもう一度見直すことを試みるのだが、同じ場所でありながら違った様相を呈していることに気付かされる。それはある意味必然的であって、パリにある実際の場所も『ナジャ』のテキストに書き込まれることによってテキスト独自の空間を形成することになり、それは最早現実のパリではないということになるからだ。それでは現実のパリは確かに存在するとしても、『ナジャ』において成立しているテキスト空間としてのパリは超現実と言えるのであろうか。そうだと

とも言えるし、そうでないとも言える。仮にナジャの物語がブルトンが実際に体験したことではあっても、それが現実だと思っていたことがブルトンが見ていた夢だったと解するなら、それはまさに超現実だったと言えるからである。ところがこの夢から覚めたブルトンにとって、この物語が持つ意味は恐らく現実的なものとなるだろう。「仮に私が、我慢強くそして私が持っていると確信しているであろういわば無私な目でこの物語を読み直したとしても、私自身の現在の感情に忠実であるとすれば、私が何を残しておくことになるかほとんどわからない。私はそれをどうしても知りたいというわけではないのだ。」(PI p.746)

このような現実の重みから抜け出そうとして再度超現実的なイメージを志向するならば、ブルトンが『シュルレアリスム宣言』でピエール・ルヴェルディのイメージ論を援用する形で提案している、「隔たった二つの实在」(PI p.337)が偶然にも接近することによって生じる「イメージの光 (下線原文)」(PI p.337)こそ超現実的であるとする主張を受け入れることになる。このイメージ論は『通底器』においても主張されていて、夢の解釈分析に続いて超現実を志向するという姿勢から言及されているものである。ここでは「お互いにできるだけ離れた二つの対象を比較する、もしくは、全く別の方法で、突然かつはっとさせるやり方でそれらを対峙させることは、詩が切望し得る最高の務めとしてある。」(PII p.181)と表現されている。この種のイメージはそれこそ無数と言える程存在するわけだし、敢えて分類することも可能であり有意義でもあるだろうが、ブルトンにしてみれば「シュルレアリスムのイメージの数え切れない型は分類を要求するだろうが、今日のところは、それを試みようという気になれない。個々の類似性に沿ってそれらをついにまとめることはあまりにも遠くに私を連れて行ってしまおう。私は、何よりも、それらの共通した効果を考慮に入れたいのだ。」(PI p.338)ということなのであるが、そこで示されているとりあえずのいくつかの分類はさておき、そこにあるものは言葉のみ記号のみであり、実体を伴っていないということなのである。例えばブルトンは『シュルレアリスム宣言』において分類の問題に触れる際いくつかの例を提示しているのであるが、その中でロートレアモンの「シャンパンのルビー」(PI p.339)がある。そのイメージはまさに超現実的ではあるが、そしてまたシャンパンもルビーも実際に存在するものであり、各々の言葉に対して指示物は実在しているし、我々もそれを認識することができる。しかし「シャンパンのルビー」という二つの实在の接近によってそれらの言葉は実体を見失ってしまう。それにそれが実在する必要もないのだ。それはそれらが現実にある言葉で現実にあるものを指示するものでありながら、最早現実のものではないからだ。つまりその時点において超現実的になるのだ。このような関係はまさに超現実そのものについても言えるのであって、超現実が成立する前段階において二つの实在とは現実と夢であり、それぞれは容易に認識できるものであり日常生活においても諒解しているのであるが、この現実と夢が融合したその時点において、それらは实在性を失い、融合した結果の産物である超現実とは現実でも夢でもなく、ただの実体を欠いた記号にすぎなくなるのである。

### 第三章 実体を欠いた記号の空間

ブルトンは『通底器』において自ら見た夢を記述するとともに、それについての解説的覚書



と分析を付け加えている。それは実際に見た夢を、現実と照らし合わせて現実の側から分析するというものである。ここにはフロイトが『夢判断』において引用しているヒルデブラントの考えがある。「夢が何を表現しているも、現実とこの現実から出発して展開される精神生活においてその要素を取っていると言える…。その成果がいかに奇妙なものであっても、しかしながら決して現実世界から逃れることはできないし最も異様で滑稽であると同様に最も崇高であるその創作物は感知し得る世界が我々の目に提供しているものが目が覚めている時の思考において何らかの方法で手に入れたものから常にその要素を引き出しているはずである。」(PII p.111)

このような考えから出発して『ナジャ』を捉えてみる時、まずこれはブルトンが実際に体験した出来事であると認めることができる。これはマルグリット・ボネの研究からも明らかである。しかし一方でこれを単なる作り話というのではなく、現実性を欠いた記号のみによって成立しているまさに超現実的な世界であるとするなら、それはいかにして明らかとなるのか。まずナジャを巡ってブルトン自身ナジャ自身にも問いかけるし自問もするのであるが、ナジャとは一体誰であるのかということによって様々な言説が展開される。ところがテキスト上においては物語の最後においてナジャの存在自体が疑われるような結末になることから、実体を欠いた記号の連鎖ということにもなるのである。更にテキスト中においてナジャは様々な女性に間違えられるという体験をし、ある時はレナと呼ばれ、ある時はD…嬢として呼び止められたりもする。またナジャ自身ブルトンが書いた『溶ける魚』の中にある戯曲風のテキストに出てくる登場人物の一人について「〈エレヌ、それは私です〉と、ナジャは言っていた。」(PI p.693) わけであるし、ブルトンもナジャの物語の最後において「その城の前を通りながら、ナジャはマダム・ド・シュヴルーズに自分の姿を見た。」(PI p.714) と書いているのである。更に10月12日の日付のテキストの冒頭は次のようなものである。「私がナジャのことを話したマックス・エルンストは、ナジャの肖像画を描くことを承諾するだろうか。サッコ夫人は、と彼が私に言っているのだが、彼は好きにはならないしそれに——これはほとんど彼女の言い回しなのだが——彼が愛している女性に肉体的な苦痛をもたらすことになるだろうナディアとかナターシャとかいう女性を通り道で見たのだ。」(PI p.710)

ブルトンによれば女占い師のサッコ夫人は占いにおいて間違ったことがないということであるので、ナジャはナディアとかナターシャとも考えられるのだ。このように見てくるならば、ナジャ自体自分で選んだ名前であっていわば通称であるわけだし、テキスト上においても様々な名前と呼ばれることがあるわけであるから、ナジャという名前も実体を欠いているというだけでなく、いわばよくわけのわからない名前も次々と出てきて、まさに名前という記号が散りばめられているのである。更に超現実という観点から場所に注目しても、『ナジャ』は場所を巡るテキストであると言うことができる。そもそもブルトンはナジャの物語を書き始めるにあたって、「私は出発点として、私が1918年頃住んでいた、パンテオン広場の、偉人ホテルを、そして休憩地として、1927年の8月私が確かに以前と変わりなくいる、ヴァランジュヴィル・シュルメールのアンゴの館をとろう」(PI p.653) と書いているのである。「休憩地」とあるからにはまだ先も目指すということになるはずだが、ナジャの物語の後でブルトンはある街を指し示す道標を見出すのである。つまり「素晴らしくかつ裏切ることのない一つの手がまだそん

なに前ではない時に「オーブ県＝黎明」という言葉の記載があるスカイブルーの巨大な道路標識を私に指し示したのだ。」(PI p.749)

この道標はフランス語では LES AUBES であり、訳せば黎明となるのであるが、実際にはオーブ県を意味している。これはパリから南東の方向に位置しているが、ここを通過して当時ブルトンの愛人であったシュザンヌ・ミュザールと旅行した先である南フランスのアヴィニョンを最終的には目指しているものと思われる。つまりテキスト中において示される「ある街」とはこのアヴィニョンであることは「どんな名残惜しさもなく、今私は街の形が別のものになり遠ざかっていくのさえ見ている。(中略)アヴィニョンの方には驚くべき延長があるにも拘らず、境界線は私の意欲をそぐので、私はこの心的風景を下書きの状態で残すのだ」(PI p.749)の記述から明らかである<sup>2)</sup>。従って出発点、休憩地、目標地点と明らかになっているわけであるし、テキスト上においてはこれらの地点は固定されたものと捉えることができるが、『ナジャ』のテキストにはこれらに限らず様々な地名が出現するのである。出発点、休憩地、目標地点がはっきりしていて、それさえ取り逃がすことがなければ、後はどこに行こうが自由自在である。ブルトンはナジャの物語の後物語が辿った場所を見直そうとするが、以前とは違った様相を呈しているわけであるし、別の場合によっては架空の地名が紛れ込んでいてもテキストは充分成立するのだ。これはブルトンがこの『ナジャ』というテキストを「私はこの本が《スイングドアのように開閉自由自在》であって欲しいと思っていた」(PI p.751) ことと関係している。つまり『ナジャ』によって提示された物語の舞台が超現実そのものであるかあるいは超現実的な場所であるかは別にして、実体を欠いた記号によって成立していることが明らかだろう。そしてこれについての理論的補強として、ドゥルーズ＝ガタリの『ミル・プラトー』を参照することができるだろう。まず実体を欠いた記号、言い方を換えればシニフィエなきシニフィアンについてだ。「記号(意味する記号)のシニフィアンの制度は単純な一般的様式を持っている。つまり記号は記号を参照し、無限に記号しか参照しないのだ。そんなわけで人はまさに、極端な場合、記号の概念なしで済ますことができる、何故なら人は記号が指し示す物事の状態との関係も、それが意味する実体も特に考慮せず、記号がいわゆるシニフィアンの連鎖を定義する限りにおいて記号と記号の明白な関係だけを考慮するからである。」(MP p.141)

例えばナジャは誰それであったと別の名前を提示すれば、本質的な理解は全くなされていなくても拘らず、全てを諒解したかのようなになるわけであるし、『ナジャ』における超現実はこの場所であると提示されれば、それが仮に架空の地名であったとしても問題は解決したかのように機能するのである。つまり「何らかの複数の記号で記号になる。これこれの記号が何を意味しているかではなくて、大気の無定形の連続体に影を落とす初めも終わりもない網目状のものを形成するために、それが他のどんな記号を参照するか、他のどんな記号がそれに付け加わるのかを知ることが肝心なのだ。」(MP p.141)

確かに何らかの解釈は付与され続けるだろう。しかしブルトン自身『ナジャ』において様々な思考を巡らせるのだが、そこで与えられるのは更に別の記号ということになる。従ってここで明らかとなるのは、ナジャは日常生活においてどこにでもいて容易に見出せるような女性ではなく、まさに謎の女であるわけだし、超現実も現実中存在し得るわけではないはずであるが、し

かしどこにあるのか、果たして本当に存在するのかわからないものとして我々に認識されるということである。このような状態に我々は満足することができるのか。「記号を参照する記号は奇妙な無力、確信のなさに襲われる」(MP p.142)、つまり納得した形で意味が与えられるということがないのだ。「人はこのような制度において何も結着をつけない。これはそのために出来ていて、人が債務者であると同時に債権者でもある無限の負債の悲劇的な制度なのだ。ある記号は、それが通過し、そして記号から記号へと、更に他の記号を通過するために更新していく別の記号を参照するのだ。」(MP p.142)

このように記号の連鎖が存在し途切れることなくシニフィアンの体制が維持されることによって、ナジャは仮に存在しなかったとしても謎の女性として生き続けるわけであるし、現実にはどこにも存在しないはずの超現実も存在しないことが明らかにされることなく宙吊りの状態で存在し続けるのだ。

#### 第四章 記号化された主体

グノーシス主義において物質=肉体が悪の存在であり、そこから解き放たれるのが救済であるとするなら、ブルトンの考える超現実的世界において主体はどのように救われているか見ておく必要があるだろう。少なくともそのイメージを捉えるために、ブルトンの『溶ける魚』をまずは参照してみる。このテキスト1において幽霊が登場するのだ。幽霊というと、ブルトンは『ナジャ』のナジャの物語が始まる前のまさに冒頭において、「私は誰か。」(PI p.647)について自らの考えを述べる際に幽霊を引き合いに出しているのだ<sup>3)</sup>。まずこの『ナジャ』におけるブルトンの考えから見ていくことにしよう。ブルトンは「君が誰とつきあっているかを言えば君が誰であるかを当てよう」という諺を引き合いに出している。要するに友だちを見ればその人がどんな人かわかるということだ。ここでつきあうというのはフランス語では *hanter* で、これは幽霊などがつきまとうとかとりつくという意味もある。この場合とりつくのが君ということであるから、君が幽霊ということになる。このことを確認した上で、ブルトンの考えを辿っていくことにしよう。「この最後の言葉 (*hanter*) はあるいくつかの存在と私との間に私が考えていた以上に奇妙で、避け難く、当惑させる関係を打ち立てることを目指しながら、私を惑わせていることを認めなければならない。それは意味する以上のものを言っていて、私の存命中に私に幽霊の役をやらせ、当然私である誰か(下線原文)であるために、私が存在することをやめなければならなかったことに言及するのである。この意味においてほとんど不当なやり方で捉えて、私の実存の客観的な表われ、多かれ少なかれ意図的な表われとして捉えているものは、この人生の範囲内で、真の領域は私には全く見知らぬある活動から伝わってくるものにすぎないと私にほのめかすのだ。私が《幽霊》について持っている表現は時間や場所のいくつかの偶然に絶対的に服従すると同時にその外観においてもそれが提供している型通りのものとともに、何よりもまず、私にとって、永遠であり得る悩みの種の有限なイメージのようなものに相当するのである。」(PI p.647)

ブルトンにとって「私」とはまず霊的な存在であって、現実存在する「私」となるためには現実に存在している誰かにとりつかなければならない。確かに誰かにとりつくのであるから、

それなりに気に入っているとか相性がいいとかの基準はあるのかもしれない。しかしとりついて初めてわかることもあれば、とりついてはみたもののまだよくわからないでいるということもある。本質的な部分はこの霊的存在なのであるが、現実にとりついた相手の服を身に着けるようなもので、それらは記号にすぎないわけである。そしてそれらの記号も単なる趣味の問題や容姿性格といったものだけではなく、どのような運命を辿るのかという重要な問題も含まれることになる。以上のことを理解した上で、『溶ける魚』のテキスト1に出てくる幽霊を見ておこう。テキスト1に幽霊が絶えず登場しているわけではなく、時折出現するという程度だが、その描写を見ると次のようになっている。「幽霊はつま先で入ってくる。彼は塔を素早く視察し三角形の階段を降りる。彼の赤い絹の靴下はイグサの小さな丘に旋回する光を投射する。幽霊は大体二百歳で、まだ少しフランス語を話す。しかし彼の透明な肉体の中では夜露と星の汗が活用している。彼はこの柔らかくなった地方に自分で道に迷ったのだ。(中略)途中で、聖ドニと一体を成そうなどと思った幽霊は、それぞれのバラの中に彼の斬られた首を見ると言い張っていた。」(PI pp.349-351)

つまり幽霊の存在とは中が空洞であって、様々な記号を身にまとうことでそれと認識されることになる。ここにあるのは記号が空洞を埋め尽くすという関係ではなく、ありのままに捉えようとすると空洞であることが明らかになってしまうということなのである。この空洞こそラカンの言う現実界であって、我々が現実として捉えているものは記号にすぎないのである。確かに「私」として名指される象徴的構造の中心を形成しているのであるが、実のところは空洞であり、それを捉えること自体が不可能なのである。「私」は「私」であるために誰かになりたいと思う。つまり誰かを欲望の対象とするわけである。しかしその誰かも欲望を持っていて、結局のところ「私」はどの欲望を欲望したらいいかという問題となる。これはシニフィアンがシニフィアンを呼ぶ連鎖の構造である。このシニフィアンからその意味するところを探っていくとすると、そこには空洞しかない。この欠如こそが主体なのであって、ブルトンの提示した例で言えば、幽霊こそ主体的存在なのである。通常感覚で言えば、内面は表現すべきものに満ち溢れていて、それを表出したものが記号であるということになるが、ラカンによれば逆であって、表出されたシニフィアンは内的な空洞を隠蔽しているのである。空洞である主体を埋め尽くすような記号が見つからないという事態は、要するにシニフィエを欠いたシニフィアンということであり、そのことが逆に空洞である主体を明らかにしているのである。『ナジャ』について言うなら、ナジャがブルトンを満足させる存在ではなかったが故に別れることになったのではなく、「私は誰か」を探求するブルトンがこのことによって主体を明らかにしているということなのである。ここにあるのは一種の弁証法である。ブルトンは「私は誰か」という問いをまず立てて、次に「私」がとりつくことになる誰かによってそれを明らかにしようとする。これがブルトンにとって主体を定義付ける命題となる。しかしこの企ては失敗する。そもそもナジャはブルトンの考えるような誰かではなかったということが最後に明らかとなる。しかしこの失敗こそが空洞としての主体を明らかにするのである。つまり企ての失敗こそが主体の真の意味を教えるのである。「私が誰か」を明らかにするために誰かに依拠するという企ては命題の定立なのであるが、その企てが失敗したということはまさにその否定である。ところがその

否定はむしろ歓迎されるものであって、そのことによって「私」は誰かへの依存から解放されるのである。つまり誰かに依拠しなければならないというのは、ブルトンにとって「永遠であり得る悩みの種」(PI p.647)だからである。この否定の否定は誰かに依拠することによって自己同一性を確立することが不可能だと決定付けるものではないし、また否定の否定が必要な条件というわけでもない。ただ自己同一性が確立されないまでも「私」が実のところは空洞であるということで、最低限の真実に気付くことのできる一種の整合性を伴った安定した状態を作り出しているということは言えるのだ。その上で必要とされるのは他の誰かの存在ではなくて「私が他の人とは区別されていること」(PI p.648)といったようなものである。ここにあるものは他の人たちの持っているものではない何かということであって、他者の否定から生まれる反動形成なのである。この否定がなければ「私」の自己同一性も崩壊してしまうだろう。ここにあるのはただ単に自分らしさを出すために他の人とは違ったことを求めるという見せかけのものではない。ここで言う否定とは、まず自分が自分であるために誰かを必要としたという前提がまずあり、その企てが失敗することによって否定された状態を更に否定するという否定の否定なのである。わかりやすい例を挙げるなら、人種間民族間で友好関係を築こうとしたところ、人種差別的な動きがあったとして、その差別的な動きをした当の相手を攻撃して対立を深めるというのではなく、差別的な動き自体に反対するというようなものである。従って否定の否定とは否定の後に出てくるものではなくて、当初から既にあったものに立ち戻ろうとすることにすぎない。ただこの否定の否定によって問題が解決するというわけではない。むしろ当初の「私は誰か」という問いかけ自体に既に答えが内包されていたという事実気付くべきなのである。つまり「私は誰か」という問いかけに対して、その答えを明らかにすることはできないにしても、「私」は誰かを必要としているということである。ただ現実には「私は誰か」という問いに対する答えがわからない、あるいは構造的に秘密にされているとして、それでも「私」の主体的整合性を確保するためには、その誰かも主体的には空洞であることに気付くことなのである。つまりブルトンが「私は誰か」という問いに答えを見出すためにナジャに働きかけたとしても、ナジャ自身にとっても「私は誰か」ということになるのであり、この事実気付くことによって最低限主体は存在していると言えるのである。

## 第五章 記号化された現実と現実界

ブルトンが『ナジャ』の冒頭において「私は誰か」という問いかけを発する時、それがブルトンの個人的な問いかけではなく、大文字の他者によって発せられたものであるとしたらどうだろう。確かにこの問いかけはブルトンにとって『ナジャ』に限ったものではなく、マルグリット・ボネの研究によれば以前からあったのだ(PI p.1523)。1916年の夏になると、ブルトンは自分自身の中に矛盾を感じていて、テオドール・フランケルに手紙を書いて、その中でこの「私は誰か」という問いを発している。1920年には後に妻になるシモーヌに同じ問いかけを手紙でしている。この問題はブルトンの中で年とともに深まっていったのは明らかであるとしている。ただこの問題はブルトン自身自分だけでは処理できないものであるとも感じていたようで、『ナジャ』において既に触れた幽霊に言及した後で次のように書いているのだ。「私の人生

はこの種のイメージでしかない、私は踏査していると信じていながらも行った道を引き返しているとか、いかにも実感しなければならないことを知ろうと努力しているとか、私が忘れてしまったことのほんの一部を知るとかいう運命にあるのかもしれない。」(PI p.647)

この「運命にある」ものは何なのということから、大文字の他者が出てくるのだ。そしてそれに対して答えられないでいるのが主体なのである。この問いの構造としてあるのは、それなりの適切な答えを要求しているのではなく、空洞であることを気付かせるという一種暴力的なものである。この問いに対して何かもっともらしい答えを用意することはできるだろう。あるいは空洞であることを直視しないためにそのとりあえずの答えを正解として認める社会的認識も存在するだろう。しかしそれが正解ではないことは、その答えを提示した主体が知っているのである。つまり本当はそうじゃないという欲望が存在するのだ。これがラカンの言う現実界である。それでは正しい答えを出すためにその核心を追求すればいいではないかということになるが、これこそラカンの言う対象aなのである。つまり掴まえたと思っても手の間からすりりと逃げていくような対象なのである。もっともこのような問いを回避する方法もあって、それはその問い自体を他者に、つまり自分ではない誰かに投げ返すことなのだ。あるいはこのような問いに答えられないことを、自分だけではなく他人においてもよくあることだと一般化してしまうのである。ブルトンが『ナジャ』においてナジャの物語の後に「君」に語って聞かせようとしたドゥルイ氏の話がある。日常生活においては他者によって認識されることによって「私は私である」という自己同一性を確立しているかに見える。ところが人相とか姿形が変わっただけで、その同一性はもろくも崩れてしまう。わかったつもりになっていたのはあくまで表層的次元におけるものであって、主体化を問題にするような次元においては自己同一性などというものは簡単にわかるわけではなく、それは自分だけではなく他人においてもそうなのだということだ。このことによって無能力感や責任といったものは少しは薄められるかもしれない。しかしこのことで問題は解決しないのだ。他人が知らないのは当然で、自分はわかっているべきだ、何故なら自分のことだからだというわけである。しかし何故知っているはずだという認識が前提とされるのか。それは社会を形成する象徴的構造にある形式的関係の存在を社会が求めるからである。名前や生年月日、指紋あるいは何らかのコードやパスワードが存在すれば、それで本人として認められるということで成立している社会なのである。これは何も現代に特有のものではなく、社会が成立する上での前提条件というべきものである。従ってこのようなネットワークに還元できないものは不必要なものであり、取るに足らないものである。しかしそのような残滓が象徴的關係の上で重要な役割を果たすという逆説にブルトンは自覚的なのだ。ブルトンは『シュルレアリスム宣言』で次のように書いている。「不可思議はその詳細だけが我々に到達する一種の普遍的な新発見の性質を漠然と帯びている。それはロマン主義の廢墟（下線原文）であり、現代風のマネキン人形（下線原文）でありある時代を通じて人間の感性を動かすのに適した全く別のシンボルである。我々を微笑ませるこれらの範囲内で、しかしながら取り返しのつかない人間の不安が常に表われる、そういうわけで私はそれらを考慮に入れるのであり、痛ましくつらい思いをさせられた他のもの以上である、いくつかの天才的作品とそれらを切り離せないと判断するのである。それはヴィヨンの絞首台であり、ラシーヌのギ

ロシア人女性であり、ボードレールの長椅子である。」(PI p.321)

ここにあるものはある意味均衡を保っている構造化された象徴的關係の中に物質的な異物が入り込んでいる状態である。わかりやすく説明するために、ラカンも取り上げているポーの『盗まれた手紙』を例として挙げよう。王と王妃は仲のよい関係であり、王室の秩序は保たれている。大臣も王に仕える身として働いている。しかし王妃の不倫を暴くことのできる手紙が存在し、大臣はそれを王と王妃の面前で奪うことに成功する。表面的であるにせよ秩序が保たれている状態に、異物としての手紙が出現するのだ。この手紙は探偵によって見事に大臣から奪い返されることになるが、真相を知らないもしくは知らないことを装っている王を中心にして、象徴的構造を維持するために形式的関係を成立させていることを手紙が明らかにしてしまうのだ。王が王であるのは実質的に王だからではなく、王妃や大臣たちが王を王であるかのように振る舞うからだという逆説が生きてくる。そのような象徴的構造を現実界のかけらとも言うべき物質的な異物が明らかにするということである。そして更に問題とすべきは、この手紙の内容を受取人である王妃は当然知っているし、手紙を盗んだ大臣もおおよそ知っているし、手紙を手に入れた後は確実に知ることになるということである。つまり手紙が象徴的構造を維持する形式的関係の中にあって異物として機能するためには、その意味を知っている主体が存在しなければならないということである。意味が明らかでなければ、それこそただの紙切れとして存在する他ないのである。このように考えるならば、ブルトンの自己同一性を問題にしている「私は誰か」の問いかけがもたらす象徴的秩序も明らかになってくるだろう。「私は誰か」という問いに対して答えようとすれば、あるいはその問いかけに意味があるとすれば、その答えを知っている誰かが存在しているはずだということを前提としなければならないのである。例えば患者にとって精神分析家は全てを知っていると考えられている。もちろんこれは幻想にすぎないのだが、ある意味必要な前提なのだ。「私は誰か」を誰も知らないし、それを知ることの意味がないとは考えられないのである。社会は本人自身が一番よく自分のことをわかっているはずであるから知っているはずだとして本人に還元していくのであるが、その本人は本当のところはよくわかっていないということを知っている。ところがこの本人も「私は誰か」について誰も知らないとは考えず、誰か知っているはずだと考えるのである。ここにおいて自己同一性を確立するためには、常に誰かに助けを借りなければならないということになるのである。個人的素質とは別に普遍的素質を探求するブルトンが「私にとって固有のものであろうが今の私には与えられていない」(PI p.648)と言う時、そこには当然知っているはずの誰かが想定されているわけである。ここにおいてその誰かを特定することはできないし、それは自分と同じように「私は誰か」を知らない誰かであることはないから、それはラカンの言う大文字の他者となるはずである。つまり大文字の他者を中心にしたシステムが存在することになる。このことから今の自分にはわかっていないがいずれ真相は明らかになる、何故なら真相を知っている誰かが存在する以上、何らかの形でその真相に遭遇することもあるはずだということで、真相を知らない状態にとりあえずは安住することができるのである。もちろんだからといって真相を明らかにすることを放棄したわけではなく、幻想を抱き続けるわけである。ブルトンにとってナジャがナジャであり続けることも幻想の一つとして考えられるだろう。「私」とはもともと

空洞なのであるから、その空の場所にある種の幻想がすっぱりとはまり込む形で存在し得た時、ラカンが「真理はフィクションの構造を持っている」と言うように、真理の効果を生み出すことになるのだ。ただヘーゲルも言うように一方で真理に直面することの恐怖も同時に存在するのであって、真理はもうそこにあるのに真理との遭遇を回避したいという欲望が勝り、これでもないあれでもない次々と幻想を生み出し、真理との遭遇を先延ばしにすることになるのだ。

## 第二部 シュルレアリスム的な精神の一点

### 第六章 否定できない肉体の存在

グノーシスというのは知識・認識を意味するギリシア語であって、グノーシス主義は真理なり神なりを認識することで救済が得られるということなのである。既に考察したように真理に至る道はとりあえず設定されているわけであるから、現実を取り巻いている記号の中からどれかを選択するなり順序を入れ替えるなりあるいはそれらを構造として捉えるなりすればいいということになるはずである。仮にこれが正解であるとして、これを現実で行なわなければならない、肉体の中の一つの器官である脳によって可能にしなければならないという事態が一方である。グノーシス主義においては、人間には物質的部分、心魂的部分、霊的部分の三つがあるとされているが、そもそもこの霊的部分を認めない考えもあり、死んで肉体が減れば全ては終わりであると考える人にとっては全てはこの肉体がある現実において可能だということになる。どの立場に立つにせよ、そしてグノーシス主義のように肉体は悪であると考えるときも、とりあえず肉体を維持しながら真理へと到達しなければならない。更に言うなら、ブルトンはこのような肉体の消極的受容ではなく、むしろ積極的な捉え方をしている。ブルトンは『シュルレアリスム第二宣言』において、愛の対象としての女性の問題に触れて次のように書いている。「女性の問題は、この世界において、素晴らしくかつ怪しげに存在するものの全てである。そしてそれは墮落していない男性が[革命]においてだけではなく、愛においても (下線原文)、置くことができるはずである信頼が我々をそこに連れ戻すまさにその点においてである。このように力説するのはこれまで私にとって最も多くの憎悪に匹敵したと思われるものであるだけ一層私はそこを力説するのである。そうなのだ私は信じているが、イデオロギー的な口実を頼みとするかしないかは別にして、愛を断念することは何らかの知性に恵まれた男性が人生の間で犯し得る贖い得ない稀な犯罪の一つであると常に信じてきた。自分を革命的だと言うこの男性は、しかしながらブルジョワ的な政体における愛の不可能性を我々に説得したいだろうし、別の男性は愛そのものよりも嫉妬深い原因に尽くす義務があると主張する。実のところほとんど誰も、目を見開いて、人間の最高の啓蒙のために、救済と精神の破滅という頭から離れない考えが一つになる愛の偉大な日に、敢えて立ち向かおうとしないのである。この点で完璧なる期待と敏感さの状態を持ちこたえることがなければ、誰が、と私は尋ねるのだが、人間的に (下線原文) 約束を守ることができるのか。」(PI pp.822-823)

つまりシュルレアリスムを標榜するブルトンが、シュルレアリスムとは関係のないところで愛の問題を個人的に捉えているというわけではないのだ。愛の問題はシュルレアリスムの中にある重要な要件である。そしてまたこれもシュルレアリスムにおいて重要な案件ともなってい



るが、極めて現実的な課題として捉えられるのは、そもそも精神だとか真理だとかに関心を持っていられるのは、生活面もしくは健康面で問題がない場合に限られるのではないかということである。仮に生活面や健康面に重大な問題がある場合、それどころではないという事態に至るからである。ブルトンが言うように、「現実はまだ単に理論的重要性を持つだけではなく、フォイエルバッハが願っていたように、情熱的にこの現実を訴えるという生死の問題であるという全ての人の宿命であると、私は思う。」(PI p.795)

このような付帯的条件といったような形で肉体の世界を思い描くだけではなく、より根源的な問題として捉えなければならないのは、そこに欲望が存在するからだ。全てが満たされているということは現実的にはあり得ないが、仮にそれが可能だとして欲望は消滅してしまうだろう。欲望が満たされない時、それに辻褃を合わせるために思考を働かせることになるのだ。欲望は常に我々を先へと進ませることになるのだ。このような事態は肉体を否定したところで、欲望にしがみついていることで変わることはない。ところがこの欲望は真理を知りたいという方向に突き進むかといえば、必ずしもそうではない。ラカンも言うように、真理に直面することの恐怖もまた存在しているわけで、実のところはあまり知りたくないということなのだ。従って肉体を否定し、そのことで欲望を否定することは、知りたいという欲望を抑圧することになり、結局は本当は知りたくないという欲望に逆説的に応える形になる。「私は誰か」という問いかけは、実のところ私は空洞であり意味もないということがわかった主体から発せられるのだが、それでも問い続けるのはその空洞を埋め意味を教えてくれる誰かがいるからだ。しかしその誰かが実は存在せず、従って空洞も埋めることができず、意味さえ当初から存在しないという事実を直面したのだろうか。そのため真理に直面することをできるだけ先延ばしにして遅らせるのである。ただそれをどのようにして可能にするかということである。本当は真相に気付いているのだが、知らない振りをするというのは自己欺瞞である。この問題を解決するために我々が参照すべきであるのは、ドゥルーズ＝ガタリである。つまり我々のラカンの認識によるならば、我々が主体を確立するためには現実界のかけらとも言うべき対象 a を探し求めることになる。これはあるかに見えて、その実空虚であることから、その試みは失敗するのであるが、その失敗故に欲望は生き続けるというものである。この欲望についてドゥルーズ＝ガタリは『アンチ・オイディプス』において次のように書いているのだ。「つまり欲望する生産であり——個々の人間にでもなく構造にも還元されるがままになることもなく、想像界と同様に象徴界の向こう側とか下とか、それ自体において [現実界] を構成している欲望の機械なのである。(中略)まさに [現実界] と分析機械、欲望と生産のつながりを結び直すこと。というのでも無意識それ自体は個人のものでなく構造的でもなく、想像することもないし表現することもないと同様象徴化もしないのである。それは作動するし、それは機械的なのである。想像的でもなく、象徴的でもなく、それはそれ自体で [現実界] であり、『不可能な現実的なもの』でありその生産である。」(AO pp.61-62)

つまりラカンの考えるならば、欲望は真理を明らかにしたいと思う。ところがその真理なるものは空洞であるが故にこの試みは失敗するのであるが、失敗することによって欲望は生き続けるわけで、絶えず真理解明に向けて突き進むことになる。ところが欲望はそれとは逆に真

理を知ることの恐怖を覚えて、本当のところは知りたくないと思う。このように欲望は分裂化されているわけで、意味を求めて一方向にのみ直進していくものではないのだ。そしてここにおいて注目すべきは、我々が求めていくべき対象は我々を越えたところにある実質的には空洞のようなものではなく、我々の内部にある実在する無意識なのだということである。この無意識に至る過程は単なる快楽の追求ということではなく、真理の追求にも奉仕するという役割を担っている。というのをもたえ空洞があっても、空洞に気付くことによって主体が確立し、欲望する諸機械に抑制を及ぼすことになるからだ。つまり「無意識の全ての連鎖は二重に一義化され、線状化され、専制的なシニフィアンに宙吊りにされている。欲望する全ての生産（下線原文）は、表現（下線原文）の要求、表現における表現するものと表現されるものの活気のない戯れに、押し潰され、規制されている。そしてそれが最も重要な点なのである。欲望の再生産は理論においてと同様治療の過程においても、単純な表現に余地を残す。生産的無意識は表現される——最早神話や、悲劇や、夢において表現されることしかできない無意識に取って代わられるのである。」（AO pp.63-64）

これによりブルトンが『ナジャ』においてナジャの物語の後無意識に依拠することを宣言していることの理由が明らかとなるだろう。ブルトンはシュルレアリスム精神の具現化とも言うべきナジャと出会い、愛の対象として捉えるのだ。ところがナジャの物語の最後においてナジャを見失い、またナジャが存在することによって現実のバリが楽園と化していたにも拘らず、その街が変形し、超現実を想起させるある街について言及しながら、その直後いわば唐突に無意識への依存を明らかにするのだ。つまりブルトンはナジャを求め、また超現実を求めていた欲望の根源が無意識であることを再認するのである。ドゥルーズ＝ガタリが言うように、それは想像上のものでも象徴的なものでもなく、実在するものであり、従って対象 a により見失われることなく、常に探求されるべく存在しているのである。

## 第七章 ドゥルーズ＝ガタリの此性

主体にとって真理というものははるか遠くの外部からもたらされるように思われるが、それは実のところ空洞であって我々を満足させることはない。ところがそれとは対照的に自らの身体内に真理を発見することがあるのだ。それがドゥルーズ＝ガタリの此性である。我々の身体は物質としてだけ存在しているのではなく、外界からの刺激や自らの欲動、欲望とないまぜになったいわば混合体として存在するのだ。ドゥルーズ＝ガタリの出発点は次のようなものだ。「身体はそれを特定する形によっても、実体や特定された主体のようなものとしても、それが所有する器官やそれが行使する機能によっても定義されない。一貫性の観点から、身体は経度と緯度によってのみ定義される（下線原文）。つまり運動と活動の停止、速さと遅さのこのような関係の下で身体に属している物質的要素の総体（経度）、このような能力や強さの度合の下で、身体ができる集中的な情動の総体（緯度）である。」（MP p.318）

つまり身体というのはあたかも機械のように十分にかつ円滑に機能していればそれで問題はないということではないのだ。それでは快適であればいいのか。確かに快適であればいいだろうが、問題にしているのはそれではない。ドゥルーズ＝ガタリは此性と名付けている。「全ては

分子や微粒子の間の運動と活動の停止の関係であり、影響を及ぼすとか及ぼされる能力ということの意味で、これは此性なのである。」(MP p.318)

これでも十分わかりにくいですが、もう少し先に進むと次のような説明がある。「天体暦は、それは同じ時間ではないけれども、永続的な暦より少ない時間というわけではない。ある動物は必ずしも一日以上とか一時間以上生きるというわけではない。逆に、まとまった年数は最も長続きする主体や物体と同じくらい長いということはある。此性、そして主体や物の間で等しい抽象的な時間を人は理解することができる。」(MP p.319)

ある時間を捉えて、それだけを抽出しているわけでもなく、その時暑かったか寒かったかとか、生活の状態も考慮されるだろう。当然その時主体はどのような感情を抱いていたのかも重要な要素だ。しかしそれらを総合しただけではまだ十分ではないのであって、その時がそれ以外ではないと言わしめるものが此性なのである。ドゥルーズ＝ガタリの説明は更に次のようなものとなる。「時間が抽象的に同じである時さえ、生の個別化はその生を送りあるいは支える主体の個別化と同じではない。そしてそれは同じ「平面」ではない。速さと情動しか知らない、一貫性のもしくはある場合においては構成の平面である——別の場合には形の、実体のそして主体の全く別の平面である。そしてこれは同じ時間、同じ時間性ではない。」(MP pp.319-320)

これは時間についてだけではなく、自分自身についても言えるのだ。例えば「私」として「この私」と言う時、他の人が自分自身を捉えて「この私」と言う時、それは明らかに違うものを指しているという時に理解されるものである。だからこそドゥルーズ＝ガタリは次のように書くのだ。「というのもあなたがそれであって、それ以外の何ものでもない気付くことなしに此性に何も与えることはないだろうからである。」(MP p.320)

ただ単に他とは違う独自性を示すだけでは十分ではない。そもそも当初から同じものはあり得ないのだ。「此性は単に主体を位置付けるであろう外見や背景の中に存するのではないし、物や人を地面にとどめておくであろう付属物の中にもないとは思うだろう。これはたまたま此性である個別化された総体の中の全くの構成なのである。」(MP pp.320-321)

つまり同じ要素を持ってきて同じように組み合わせただけからといって、此性が生じるわけではない。「時空間の関係、限定は物の述語ではなくて、多様性の次元である。(中略) 一貫性の平面は交差する線に沿って此性しか含まない。」(MP p.321)

そして最終的に次のように結論付ける。「此性は常に真ん中にある。(中略) 此性はリズムである。」(MP p.321)

この此性はそれでは具体的にどこにあるのか、そしてそれはどのように捉えられるのかということであるが、ここで参考になるのがドゥルーズ＝ガタリはヴァージニア・ウルフの作品の一節を引用して説明していることである。小説の中に出てくるダロウェイ夫人を捉えて次のように書いている。「ダロウェイ夫人は最早決して〈私はこれとかあれである、彼はこれで、彼はあれである〉とは言わないだろう。」(MP p.321)

つまり此性といっても、他の人に対してこれですと言って提示できるものではないのだ。そうではなくて、「彼女は自分を非常に若いとか、同時にそうとは信じられないくらいに年を取っていると感じていた。」(MP p.321) とか、「彼女は全ての物を貫いて刃のように入り込んでい

た、と同時に彼女は外側にいて眺めていた、(…)彼女にはたった一日でさえ(下線原文)、生きることは非常に、非常に危険であると常に思っていた。」(MP p.321)とあるように、自分自身において感じたり思ったりするものなのである。それでは様々な要素と主観的なものを複合的に捉えれば、此性に到達することができるのか。ここで問題になってくるのが、此性を発見するのは自分自身であり、いわば体感的に自分自身の内部で捉えられるものなのである。そしてその実例として挙げることができるのが、プルーストの『失われた時を求めて』の中で重要な主題となっている幸福感なのである。プルーストにとって紅茶にプチット・マドレーヌを浸して口にすれば必ずや幸福感が得られるというわけではなく、全く別の状況においても得られるものなのである。実際次のように書かれているのだ。「ほんの少し前私が言っていた惨めな考えを思い巡らせながら、私はゲルマンの館の中庭に入った、そしてうっかりして私は前に進んできた車を見ていなかったのだ。運転手の叫びで私には素早く脇に寄る時間しかなかった、そして背後に車庫があった結構荒削りな敷石に意に反してつまずく程に後ずさりしたのだ。しかしまっすぐに体勢を整えながら、私が前のよりも少し下がっている敷石に足を置いた瞬間に、私の人生の様々な時にバルバックの周囲を馬車で散歩していた時に私が覚えていると信じていた木々の眺めとか、マルタンヴィルの鐘楼の眺めとか、煎じ茶に浸されたマドレーヌの風味とか、私が話したシヴァントゥイユの最後の作品が私には総括したと思われる多くの他の感覚が私に与えていたのと同じ至福の前で私の全ての失望は消え失せていたのだ。」(TR p.222)

テキストそれ自体には言葉として出てこないが、一度このような幸福感を味わい、マドレーヌ菓子の時のように確認の意味も込めて再度同じことを試みて失敗していても、何か全く別の機会に同じような幸福感を味わった時、恐らく心の中で叫んでいたのは「これだ!」という思いであり、これこそが此性の実態なのである。プルーストにしてみればこのような幸福感に満たされたいと思うわけであるし、ある種の驚きとともにこの感情は一体どのようなものでどのようにして起こるのかを解明しようと思うわけで、実際そのあたりのことはテキストに書かれている。このような思いは想像の産物でもなく、夢の中の出来事というわけでもなく、まさに現実に起こったことであるというのが重要である。それも自らそれを求めようとして手に入れるというのではなく、まさに偶然に手に入れることができるものなのである。そしてそれは「私自身の奥底にあったもの」(TR p.234)なのである。これは想像的なものでもなく象徴的なものでもなく、現実的なものである。これはラカンの言う現実界に属するものなのであろうか。確かに現実において日常的に存在するわけではなく、またその幸福感を手に入れたと思っても一時的なものであり、しばらくすればつまりその幸福感を持続させることも長期間にわたって維持させることも困難であるため、手に入れたと思ってもたちどころに消えてしまうということから対象aとして捉えることも可能かもしれないが、単なる幻想ではなく、他の感覚や感情と同じように現実に体感できるものであるというのが重要なのである。

## 第八章 精神分析の効用

フロイトが精神分析ということで夢の分析をしたのは何のためか。それは他ならぬ患者の治療のためである。つまり夢の分析などをするのである知に到達する、認識することが心因的

な病気の改善につながるのである。何も精神的な病とは限らない。身体的に症状が現われる場合もあり、それは少なくないであろう。ここにおいて注目すべきは知ることの有効性である。それは知識欲を満たしたというようなものではなく、知識が身体的に影響を及ぼすということである。しかしだからといって身体的な病因を探るために精神分析があるのではなく、精神面での分析をしていたらどういふわけか身体的な病も消え失せてしまったということなのだ。ブルトンが超現実の実現とからませて夢を一つの理想の形態とする時、そこにあるのは欲望の直接的な発露である。現実はその欲望を実現させることは不可能だから、夢でそれを可能にしようというわけである。ところが実際の夢を考えてみるならば、欲望の直接的表明とはなっていない。フロイトも言うように、そこには抑圧が働いているのだ。夢で示されている内容をそのまま受け取るわけにはいかない。そもそもそのまま受け取ろうにも訳がわからないということになってしまう。そのために翻訳作業を施さなければならないのだが、それが精神分析ということになる。ここで重要なのはその元にある欲望を探ることではなく、例えばフロイトの場合全ては性的なものに結び付けられているという批判があったが、むしろそのような欲望が何故夢の内容として現われるに至ったかを知ることである。そもそも何故欲望は隠されなければならないのか、更にその欲望を隠した上で、何故それとは直接関係がないように偽装されなければならないのかということである。つまり問題とすべきは欲望の方ではなくて、偽装の方なのである。欲望の一つとして、全てではないにしても性的欲望があることは既に知っているのである。改めてそれを指摘されたところで驚くこともない。むしろ何故欲望が隠され偽装されなければならないのか、その偽装の方法も含めて解明すべきなのである。というのも欲望それ自体よりも、偽装の方に無意識であれ意識的であれ力点が置かれていると見るべきだからである。夢が欲望の直接的な表現ではないことはその訳のわからなさから明らかであるが、その偽装についても単純な置き換えで秘密はすぐにわかってしまうというようなものではないのだ。その意味で偽装は巧妙であるということなのだが、ここまで偽装されていることの意味は我々を誤認させる錯覚させるということである。それは何故か、それには理由があるのだ。ブルトンは『通底器』において自ら見た夢を報告し分析を行なっているが、その中に次のような箇所がある。「夢は、もう一度、ここにおいて同時に二種類の欲望を実現するのであって、一つはこの女性に遠慮なく話したいというものと、二つめは私が生きているフランスと、一世紀の間にカント、ヘーゲル、フォイエルバッハそしてマルクスが生まれるのを見た思想と光の、素晴らしい国との間の、愛国的に利用できる、無理解の全ての原因を取り除きたいというものである。川や、特にゆるんだ海岸線が、地図上の東の国境に置き換わっていることは、橋を渡る（下線原文）という新しい招待、当然、その一方で、生きていくために人がその中心に沸き立っているのを見ることができた感情的で道徳的な種類の良心のとがめを私から解放する必要を私に納得させ続ける夢のかくも執拗なこの意志としてしかここでは解釈され得ない。言い換えるなら、それは、私が生きているのであるから、誰も取り替えられないということ私に納得させることを目指していてそしてそれはこの考えが人生とは逆であるというただ一つの理由のためである。」(PII p.132)

このような夢の分析における偽装のメカニズムを解明することは、ただ単に精神分析におい

て重要な問題であるにとどまらず、哲学的にも有効な論点を提供してくれる。それによって我々は倫理的倒錯を分析することができる。つまり夢の顕現内容の偽装は、我々に現実においても見られる倒錯の形を与えてくれるのだ。それは一見すると夢とは全く関係のない領域における現象を理論的に把握するための手掛かりを与えてくれる。現実とは表面的には夢よりも理解しやすい形をとって現われるため、表面的に示されたものをそのまま理解するよう求められる。ところが夢はそれ自体訳のわからないものであるが故に、直接そのまま受け取ることを可能にしない。必ずや翻訳し解釈することを求められるのだ。そしてそのような分析を経ることで、現実の中にも偽装があることを明らかにするのだ。この問題を明らかにする最も容易な方法は、夢が現実にとどれだけ影響を与えているか考えてみることだ。夢の中には現実的要素が含まれていて、現実にも体験したことが夢の中で形を変えて出てくるということとはよくある。この時我々は現実での体験を実はどう思っていたのか、どのようになって欲しいかを夢の中でどう現われているかによって判断するのである。つまり夢と現実が無関係ではないことをよく知っている。その極端な例が、夢が現実になるというものだ。つまりここにあるのは欲望の実現される場としての夢と現実であり、ともに自分の思い通りには行かないということで、構造的に同じものを持っているということなのだ。この意味で夢の分析を経た精神分析は、現実にも役立つことを理解するのだ。またここで示されている理論の流れは、夢の分析から得られたものを現実へと応用するという夢から現実へ向かうことになっているが、逆に現実から夢へということ、話の内容としては奇妙ではあっても、夢が現実を写す形で成立しているということに注目すべきなのだ。つまり夢の中でも肉体が存在しているということなのだ。よく言われるように、またブルトン自身も指摘していることだが、これが夢であるかどうかを確認するために頬をつねってみればいいというのがあるが、夢の中にいてそれを現実と諒解していることはよくあることなのだ。つまり夢の中では現実とは違い内的な主観性が言葉のみによって成立しているというのではなく、いささか奇妙であり、場合によっては不可思議でもあるのだが、外的な事象的現実性といったものを持った場所が提供されているのだ。現実を抜け出したと思ったら、そこも現実だったというわけである。これが恐らく我々が認識すべき事実なのである。つまり我々が抽象化の作業を経てある種の象徴に辿り着いたとしても、そしてそれが幻想であれ何であれ必ずや肉体を引き連れてきているということなのである。我々はその意味するところを探ろうとして、いわばシニフィエにばかり目を向けてきたが、その意味内容を知らないとしてもシニフィアンが存在することに自覚的でなければならぬのだ。これが前提なのだ。従って、仮に誤った認識を得るようなことがあれば、その原因はそもそも肉体があることに存するのだ。例えばサルトルが対他存在を説明するために提示している、他人の秘密を知ろうとして他人の部屋の鍵穴を覗く人物のことを考えてみよう。その人は自分のしていることがあまり上品ではないことに自覚的である。ただそれよりも他人の秘密を知りたいという気持ちの方が勝ってしまったのだ。そのあたりの気持ちの整理はその時点ではその人物の中で成立していたに違いない。ところが鍵穴を覗いている時に廊下を誰かがやってきた。この時その人物は卑しい行為をしている卑しい人物として規定されるということになる。事実その事態を好ましくないとして恥じることになる。これが対他存在というわけであるが、そもそもその行為の適正については自覚

的であったのである。それが現実のものとして顕現するためには他者の存在、より正しく言うなら他者の肉体が必要となるのである。この事実には自覚的である時、その人物は廊下に人がいようがいまいが鍵穴を覗き続けることができるであろう。つまり我々が知るべき真理というのは、隠されているのではなくまさに眼前に存在するのだ。この事実には気付かない限り、真理を求めてその背後を探りさ迷い続けることになるのだ。この現実においても夢においても肉体の存在があるのだという事実を否定しようとする時、そこには偽装が生じることになる。従って精神分析なり哲学なりが果たすべき務めは、その偽装の存在を明らかにし、どのように機能しているかを見つけ出すことにある。我々としてはその偽装について自覚的であればならないが、ここに至って我々が気付くことができるのは、求めるべき真理というのは物理的な意味ではない肉体の中にありそうだということで、その意味で精神分析の方法は有効だということになるだろう。

### 第九章 ブルトンはナジャを肉体的には認めているが精神的には認めていない

デカルト的な精神と肉体の二元論は通俗的な日常生活においては依然として有効だが、厳密に言えば問題がある。容易に指摘できる場所では、精神的不均衡が身体的不調をもたらすというような場合で、二元論では説明がつかないのだ。ただ二元論的に解釈すれば有効と考えられるのが『ナジャ』である。そもそも『ナジャ』とはどのようなテキストなのか、ブルトンはナジャのことをどのように思っていたのかについてはよくわからないところがある。例えば、『ナジャ』の冒頭は「私は誰か」というブルトンによる自己同一性についての問いかけで始まり、そのような考察も加えられるとともに、テキスト中においても同種の問いかけが繰り返されるのであるから、一貫した主題であることは明らかなのだが、たとえ失敗に終わったにせよ、自己同一性の探求についてどのような結論に至ったのかは明らかではない。ブルトンがナジャとの出会いを綴った最終日の10月12日以降の箇所の冒頭が「ここにおいてこの死に物狂いの追求が終わることはあり得るのか。」(PI p.714)と書くように、この探求は一時中断ということなのか。それにこのナジャの物語もナジャの不在を意味するような謎めいた終わり方をしていいる。また10月7日の記述に「私が彼女に寄せている関心の種類で彼女を安心させないとか、彼女は私にとって好奇心とか、彼女はどのように信じるができるかだが、気紛れの対象ではあり得ないということを彼女に説得しないと聞いたことはまた許し難いだろう。」(PI p.701)というのがある。ところが日付の明記されている10月12日までの記述ではなく、それ以降のもので前後の記述から見ると10月13日のものと思われるが、「別れることが結局不可能だということは、私次第でしかなかったのだ。」(PI p.718)と書かれているのである。こうなるとブルトンがナジャを愛していたのかということ自体よくわからなくなってくる。この謎を解明する鍵はナジャの物語が終わり、ブルトンにとって当時愛人であり理想の女性とも言うべきシュザンヌ・ミュザールが出現し、テキスト上においては「君」と表記されているその箇所にある。「私の言うことを聞く全ての人々にとって、観念的な存在ではなく一人の女性でなければならない君、君がキマイラであるために私に強い印象を与えたり君において強い印象を与えている全てにも拘らず、一人の女性でしかない君。(中略)そここでいくらかの再認を試み

ることができなかつたその名にかけて、私が常に自分に認めていた精霊に対するこの愛を君なしで私はどうしたらいいのか。(中略) 故意にはなく、君は私の予感するいくつかの顔と同様に、私にとって最も慣れ親しんだ姿形に取って代わった。ナジャはこうした姿形に属していたし、君が私からそれを隠してしまったのもそれはそれで結構なことだ。」(PI pp.751-752)

ここから明らかになるのは、ブルトンにとっては好みの女性像というのが存在するのだ。これは『ナジャ』だけではなく、他の著作例えば『狂気的愛』からも容易に窺えることだ。実際ブルトンにとって気に入った女性の系列というものが存在し、この中にナジャもいたし、この「君」なる女性のシュザンヌ・ミュザールもこの時点では終結点に位置している。そもそも10月4日の初めの出会いにしても、ナジャのことをよく知った上でのことではなく視覚的に入っている。またナジャの方もブルトンを拒絶することなく受け入れている。このようにしてブルトンとナジャは親しくなるのだが、ブルトンの側からすればナジャは好みの女性であったということだ。ところが逢瀬を繰り返していく上で、当然人格的なものが問題になってくる。当初はブルトンはナジャのことをシュルレアリスム精神の具現化と捉え好意的なのだが、次第にうまくいかなくなる。最初はナジャの話にシュルレアリスム的評価を与えるのだが、日付のついた記述の最終日である10月12日には「私は彼女の独り言についていくのにだんだん苦痛を感じるので、長い沈黙が私に言葉を発しにくくさせ始める。」(PI p.713)とある。要するにナジャはブルトンの好みの女性ではあったのだが、人格的にはまるで合わないということがわかる。ブルトンはナジャをシュルレアリスム的な対象として捉える代わりに、ナジャを物質的な欲望の対象として保持しておきたいと思う。つまりブルトンはシュルレアリスム精神の高みにナジャを通して近づくことを否定されているのだ。しかしブルトンはナジャの存在するこの現実を越えたところに存在する超現実的な世界に形而上学的な渴望を抱いている。従ってこの矛盾に満ちた状態から抜け出す唯一の方法は、現実の存在である物質的な対象つまりナジャという女性を手に入れ、その対象をシュルレアリスム精神の具現化として祭り上げることなのである。しかし実際のナジャはとてつもないような存在ではない。そのためブルトンがその対象をシュルレアリスム精神の具現化として所有できるのは、その対象が失われている限りにおいてなのである。このヘーゲル的な論理は、最初から失われていたものをあたかも初めて失ったかのようにして最初の喪失を繰り返すことによってその対象があったかのように振る舞うことにあるのだ。つまりブルトンはナジャと逢瀬を重ねている時点で、好みの女性であることは認めながらも、とてつもない女性ではないことを認識する。ここにおいて理想の女性としてはもともと存在していなかったのだが、ブルトンはあるかの如く錯覚していて、そこで最初の喪失を経験する。この時ブルトンの内心においては当初理想の女性は存在していたのであり、この喪失の身振りを繰り返すことで理想の女性としてのナジャがいたというナジャへの愛着を思い出すのである。しかしまだナジャ自身が喪失してしまっただけではない段階で、ナジャに対して喪失の作業を行なうという矛盾をどのように説明すべきなのか。確かに当初はシュルレアリスム精神の具現化だと思い、理想の女性と見なしていたナジャであったが、実はそうではなかったのだというだけでは十分ではない。喪失の作業を行なうのは、依然としてその対象に愛着を抱いている時である。従ってブルトンがナジャの物語の最後においてナジャの不在を暗に



示す時、実は見失ったナジャに対して自分が何を失っていたかについて自覚的でない恐れがある。むしろ喪失したのはナジャという存在ではなくて、ブルトン自身がナジャへの欲望を喪失してしまっているということなのである。10月13日にあったピヤホールでの事件はそのきっかけになったとも思われ、事実ブルトンは次のように書いているのだ。「彼女の過去の人生のいくつかの場面について彼女が私にしたあまりにも詳細な物語に対してひどく激しく反発することが私にはあったが、それについて私は恐らく非常に外見的にだが、彼女の尊厳は全く無事に終えることはできなかつたと判断していた。」(PI p.716, p.718)

人格的なことはもとより当初ブルトンに欲望を起こさせたナジャは姿を消しその効力を失っているのである。いわば最後の砦として機能していたのはナジャの女性としての存在なのである。しかし欲望は持たないながらもナジャという一個の人間は存在するのであって、欲望を満たさないながらも明らかに現実に捉えることのできる対象についてどのようにして捉えていくかということになる。ここにおいて謎の女性と出会ったところ、現実はこのような状況であったということではシュルレアリスムを可能にする現実が崩壊してしまう。ここで実質的には何もないナジャを明らかにするのではなく、それを隠すことによってナジャをラカンの言う対象 a として機能させなければならない。そのためにはシュルレアリスムが必要となってくるのだ。つまりごく普通に見えた一風変わった女性にすぎないナジャは、シュルレアリスムという解読の格子を通すと崇高な存在となるのである。それは何も幻想ではない。シュルレアリスム的な主観の認識によれば、ナジャは崇高な存在として捉えることができるのであり、まさにそれとして存在するのである。ここにおいて主観的認識と客観的現実が対になっていることが理解されるだろう。対象 a としてのナジャは何も幽霊のような存在ではなく、物質的存在として説明できるのである。ただナジャがただの女性ではないのは、シュルレアリスムの精神はナジャの中にあって初めて具現化されて機能するということなのである。従ってナジャのシュルレアリスム精神の具現化としての存在はブルトンの幻想でも捏造でもなく、まさに現実のものとして捉えられるのだ。それを可能にするのはナジャという物質的=肉体的存在ということである。

## 第十章 何かを知るだけで十分なのか、それとも何かをすべきなのか

フーコーによれば一切の知はある観点からの解釈にすぎないのであるから、ブルトンがナジャをシュルレアリスム精神の具現化として捉えることは幻想にすぎないという批判は正しくない。それではこの認識の後に何が続くのだろうか。ブルトンが『ナジャ』において求めていたものは「死に物狂いの追求」(PI p.714)なのであるから、ある認識に辿り着けばそれで完成ということになる。それが可能になるかどうかは別にして、そのように設定されているのである。ブルトンは『シュルレアリスム第二宣言』において、シュルレアリスムの行為とはいかなるものであるかについて次のように説明している。「最も単純なシュルレアリスムの行為は、両手にピストルを持ち、街中に繰り出して、できる限り、でたらめに群衆の中で発砲することにある。少なくとも一度は、現在行なわれている品位の下落と白痴化のちょっとした体制にそんな風に決着をつけたいと思わなかった者は、銃身の高さに腹部をさらして、この群衆の中で完全にマークされた位置にいるのだ。」(PI pp.782-783)

ブルトンにとって現実とは肉体によって構成されているのであり、それを精神の高みから断罪するのであり、ブルトンが観念論者であると言われる所以であるし、独我論者でもある。ここで示されているシュルレアリスムの行為とはある種の例えだが、知ることで十分ではなく、その後何らかの行為をすべきだということなのだろうか。構造主義あるいはポスト構造主義の考えに従って、現実とは存在せず我々は記号から成る世界に生きているとするなら、ある種の認識に至るだけで十分であり、そのことだけで世界を変えることができるかもしれない。ブルトンがナジャを価値がないと見なせば、確かにナジャの抵抗もしくは反撃に遭うかもしれないが、ナジャと別れるということになるのだ。ラカンの鏡像段階理論において示されているように、ブルトンが「私は誰か」という問いを立て自らを映す鏡としてナジャを捉えたとしても、結局のところナジャに自分自身を見出すことができなければ切り捨てるしかないのである。ここで錯覚してはならないのは、ナジャの中に本来的にブルトンの要素が既にある上でブルトンとの関係があると理解することである。ナジャがナジャであるのはブルトンと関係を持っている時に限られるのであって、ブルトンとの関係がなくなればナジャはナジャでなくなるのである。ナジャであることはブルトンとの関係によって生じた効果である。それではブルトンとナジャの関係はいかなるものであったのか。ブルトンは精神的にも経済的にもナジャを援助していたわけであるから、ここにあるのはヘーゲルの言う支配と隷属の関係であるかのように思われる。しかし実際はそのような関係からは自由であって、お互いに敬意を払いかつ必要としている関係なのだ。「私は、最初の日から最後の日まで、ナジャを自由な精霊、ある種の魔法の実践が一時的に自分に引き付けておくことは可能だが、従うことは問題になり得ないであろうこれらの空気の精の一つのような何かとして捉えていた。彼女は、その言葉の十全の意味において私を神と捉え、私は太陽であった（下線原文）と信じることも彼女にはあったということ私には知っている。」(PI p.714)

確かに支配隷属といった関係ではないにしても、普通の人の関係とは違ったものがある。ここではシュルレアリスム的な処理が施されているのだ。仮にシュルレアリスムの処理を取り去って、現実をありのままに見るとしたらどうだろう。実際シュルレアリスムが現実を覆い隠しているわけでもなく、シュルレアリスムの処理を取り去れば事実が見えてくるというわけでもないのだ。ブルトンにとって現実には既にシュルレアリスム的に書き込まれているのである。従ってシュルレアリスムの処理を取り去ればそこにあるものは確かに現実ではあるかもしれないが、ブルトンの欲望をかき立てることのない、つまりはブルトンが欲望の実現ということで何らかの行動を起こすという風にはならないのだ。つまりシュルレアリスムは現実にとって余計なものであるかもしれないのだが、ブルトンにとっては現実の一部を構成しているのである。ブルトンがナジャについて本当のナジャとは誰なのかを考察する時、既に真実は明らかなのである。つまりシュルレアリスム精神の具現化ではないという事実である。ブルトンはこのことに自覚的であるのだが、ナジャ崇拝をやめない。虚偽の現実に対して真実が明らかになった時、それを暴力的に暴露するという方法がある。しかしブルトンはそのような方法をとらない。ブルトンはシュルレアリスムに対する関心とともに本当のナジャとシュルレアリスム精神の具現化として捉えられるナジャとの間の距離について自覚的なのだ。それにも拘らず、ナジャ崇拝

をやめるべきではないと判断するのである。これは自己欺瞞なのか、嘘だと知りつつ真実だと思いついて振りをしているのか。ここで問題になるのは、知っていることとして知っていることについてである。ブルトンはナジャの真実の姿を見せられ、これではやっていけないと判断しナジャと別れることにするのである。従ってシュルレアリスムの幻想は知っていることの中にあるのだ。つまりブルトンがナジャに対して実際にやったことと、やっていると思いついて振りのずれの問題なのだ。ブルトンはナジャとの間にいわゆる人との関係があることを知っている。従ってそのように行動するのである。ただ相手はナジャだからということで、普通の女性と別れるというわけではなく、シュルレアリスムの幻想に導かれているということになるのだ。何故そういうことになるのか。ブルトンがシュルレアリスムを追求していく上において、ナジャにその価値を投影することになる。するとナジャがまさにシュルレアリスム精神の具現化のように見えてくる。まさにナジャは特別な存在だということになる。つまりここでは現実的な世界がシュルレアリスムの的に処理されて見えてくるということである。そのためブルトンはナジャをシュルレアリスム精神の具現化であるように振る舞うということだ。つまりブルトンはナジャを一人の女性であるということは知っているが、シュルレアリスムという抽象的なものがナジャの中に体现されているかのように振る舞うということなのだ。このように考えるならば、シュルレアリスムの幻想は知ることの方ではなく、現実つまり行動の方にあるということがわかる。つまり現実がシュルレアリスムの的に構造化されているという幻想である。仮に知ることの方に幻想があるならば、それはブルトン個人に帰せられるものであって、その幻想とは別個に現実が存在する。ナジャはナジャ的に振る舞うのではなく、あくまで一人の女性として存在する。人々はシュルレアリスムの存在を信じていないし、『ナジャ』をシュルレアリスムのテキストとして読むことはしない。シュルレアリスムの幻想とは真の現実を覆い隠すのではなく、現実そのものをシュルレアリスムの的に構造化しているというものである。つまり現実においてそのようなものとして理解されるということである。ならばブルトンが自分のしていることには幻想があるとしても、それでもそれをするということになる。つまりブルトンはシュルレアリスムが幻想であるとしても、シュルレアリスムの理念に従い続けるということだ。そのためブルトンは『ナジャ』というテキストを明らかにするのだが、その一方でブルトンがナジャを本当に愛しているかどうかは全く問わない。別に愛していなくても構わないのだ。それは現実の方に幻想があるからだ。そのため結局のところブルトンはナジャを愛していたということになるのだ。ここには内的な世界と外的な世界の明らかな分離がある。「私」は知っているが現実もそれを知っているとは限らない。つまり内的なものとは誰も知らないような精神状態を指すのではなく、現実において認識されることによって具体化されるということだ。ブルトンがナジャを愛していたかどうかということは極めて内面的なことであり、それを一人の女性との恋愛として捉えるにしても、個人的な領域に属することなのである。従ってナジャがシュルレアリスムの的に捉えられるということは、現実にあるシュルレアリスムの枠内においてはじめて可能になると言えるだろう。幻想というものは現実から離れたところに存在するものではなく、現実そのものを支えるものとして機能する。これはシュルレアリスムに限らないのであって、シュルレアリスムはその幻想の一つだということになる。現実そのものは捉えること

ができないというラカン理論の前提に立つなら、我々が向かうべきはこの現実を支えている幻想の方なのである。つまり現実についてはよくわかっていないが、あたかもこうであるかのように我々は振る舞うということ、何らかの幻想が前提とされれば、それに従って我々は行動するという事なのである。仮にそのような幻想が現実において構造化されていれば、行動に移すことは容易である。従ってこのように考えるならば、幻想がなくなれば現実社会自体が崩壊してしまうのであり、我々は現実を規定している幻想がどのようにしてもたらされるかについて考察していかなければならない。

### 終章 シュルレアリスムの精神の一点

ブルトンが『シュルレアリスム第二宣言』において「私はシュルレアリスムの深く、真の神秘化を求める。」(PI p.821 全て大文字)と書く時、ブルトンはグノーシス主義者なのだ。つまり幻想が構造化された現実に適応して生きるのではなく、自らの奥底に真なるものがあり、日常生活では気付かないでいるが、それを見出すこそシュルレアリスムの務めだということだ。我々にとってできることは何かを創造することではなく、価値あるものを見出し認識することなのだ。しかしそれはどのようにして可能なのだろうか。物質的現実の構造の欺瞞、つまり本来あるものが隠蔽され、悪が再生産されていくという現実から救済されるには、自らのうちに真の知識を見出し、物質的現実の世界を超越することにあるのだ。ここで言う真の知識は、象徴や幻想といった例えば対象 a といったようなものではない。結局のところ我々が手にするのは、自らの身体の中でしかないのだ。他者との関わりが幻想が構造化されたものに乗っかっているだけであり、ラカンの言う大文字の他者によって機能させられているにすぎないからである。ジャック・アラン・ミレールが言うように、ラカンのセミナーの表題である『もう一度』Encore は「身体内」*en corps* という意味で解されるべきなのだ。それでは身体内において何が見出されるのか。欲望や享楽ということではあり得ない。それではグノーシス主義の否定する肉体に埋没することになってしまう。そもそもブルトンが当初目指していたものは現実と夢の融合によって超現実を生じさせることで、「その獲得に辿り着かないと確信しているが私の死をあまりに思い煩うこともないのでこのような所有の喜びを少しは見積もることができるわけで、私が向かうのはその獲得なのだ。」(PI p.319)

ここで言う超現実とは外部に想定されているものであり、その獲得はほぼ不可能と言っていることから明らかな通りラカンの言う対象 a である。これでは幻想と同じになってしまう。ところが『シュルレアリスム第二宣言』で示されている「ある精神の一点」(PI p.781)とは、まさに身体内に存在するものなのである。ブルトンは『シュルレアリスム第二宣言』で公言しているようにヘーゲルを理論的根拠としているのであるが、現実と夢が超現実になるというのはまさにヘーゲルの弁証法によって説明することができる。ブルトンはプラトンの階層的二項対立を否定していて、シュルレアリスムの目的もその線に沿っている。つまり「人間の側からのあらゆる奇異な動揺を偽善的に未然に防ぐことに向けられた古くからの二律背反の偽善的な性格にあらゆる手段で被害を与え是非ともそれを認識させることが、知的見地からすれば問題であったし、今尚問題であるのだ。」(PI p.781)

このような階層秩序的二項対立の解消ということになるとまさにデリダの脱構築であり、例えば次のような箇所は脱構築で解決できるものである。つまり「美と醜、真と偽、善と悪といった不十分で、不合理な区別を無視したいという欲望が生まれ維持されるのは意味を欠いたこれらの表現のまさに嫌悪の念を起こさせる激高からである。」(PI p.782)

欲望それ自体はブルトンの身体内にあるが、このような二項対立はブルトン自身の内心にあるのではなく、まさに外部の現実にある。何も自分の中にあるこのような区別を反省的に捉えているわけではないのだ。ところが同じような二項対立の解消として示されているながらも、他の箇所とは明らかに違うものが次の箇所である。ブルトンは二律背反を解消させようとしているのだが、それは外部にある対象の問題ではなく内心の問題として捉えられているのだ。「あらゆる点から見て、生と死、現実的なものと想像上のもの、過去と未来、伝達可能なものと伝達不可能なもの、高い所と低い所が矛盾して感じ取られるのをやめるある精神の一点が存在すると考えざるを得ない。」(PI p.781)

ここで示されている対立している二項は、矛盾しているというよりも単純に区別されるもので、それを解消させることは無理があるし意味があるとも思えない。先に示した二項対立である「美と醜、真と偽、善と悪」については価値観を伴っていることから、デリダの脱構築の理論がなじむのである。しかしこの精神の一点について問題となっているのは、対象をなんとかかしようとか、価値観を反省的に捉えるべきだとかいったことではないのだ。この精神の一点については『狂気的愛』の中でも「至高点」として示されている。つまり精神の一点あるいは至高点として提示されたものは、単なる幻想や理論的産物ではなく、まさに実体験として出てくるものである。そしてそれはある種の視点の提供というものではなく、人としていかに生きるかという問題としても提示されているのである。その点について確認しておく、次のようになっている。「私は山の中にある《至高点》のことを話した。この点に長く住みつくことは一度も問題にならなかった。それに、それ以後、それは至高であることをやめただろうし、私も、人間であることをやめただろう。分別をわきまえて落ち着くことができなければ、私はそれを見失うまで、それを最早見せることができないうところまで、少なくともそこから離れたことは決してなかったのだ。私はこの案内人であることを選んだのだし、その結果永遠の愛に向かって、私に見(下線原文)させ見させる(下線原文)というより稀な特権を与えていた力の名を努めて汚さぬようにしていたのだ。」(PII p.780, p.783)

つまりこの至高点に達した境地こそ、グノーシス主義の言う正しい認識によって至高の存在へと回帰することであり救済であるのだ。この至高とはブルトンの事例がまさに山の中での体験であるとはいえ、はるかかなたの手の届かないようなものではない。日常生活の中にあるありふれた体験の中でふとした瞬間に体内で感じられる至福の時間であって、物事が理想的な状態にあるということではないのだ。これまで対象を捉えるために作用してきた欲望のようなものが、視点を変えることで対象というか現実と一体化したような感覚が身体内で生成されるということなのだ。別に外に向けられていた視点が内に向かうということではないのだ。それは身体内で感じられるものでありながら精神性といった性質を帯びていて、正確に言えば精神的超越性を感じさせるものなのだ。否定すべき現実も問題なく感じられ、悪の世界を形成する身

体はその精神的超越性をもたらす場と化するのである。しかし問題は一時的なものにすぎず、その体験前体験後で生活が劇的に変化するというわけではないのだ。例えばプルーストの『失われた時を求めて』の中にあるように、幸福感はある種解脱のような感覚をもたらす。「私がマドレーヌ菓子を味わっていた瞬間におけるように、将来に対する全ての不安、知的な全ての疑いは消し去られていた。私の文学的才能の現実、そして文学の現実についてさっき私を襲っていたものは魔法のように取り除かれていた。私がいかなる独創的な推論をしたのでも、いかなる決定的な理屈を見出したわけでもなく、さっきは解けなかった、難しい点が全ての重要性を失っていたのだ。」(TR p.222)

確かにそのような体験をする前と後とでは意識は変わるだろう。とは言いながらもその幸福感は持続するものでもなく、よくあることでもないのだ。むしろ問題にすべきは、この至福の状態にある時精神と肉体の区別も感じられず、内と外の区別もさほど感じられないということなのだ。つまりこの状態を感じているのは、美しいとか正しいとか善いとかいった判断をしている精神なのか、それとも爽やかだとか快適だと感じている肉体なのかかわからないわけだし、またそれをもたらしているものが外にある物質なのか内なる欲望の類なのかも正確に判別することはできない。ここにおいて幽霊の次元が垣間見えるだろう。しかし同時に逆説もまた存在し得るのだ。仮に肉体が消失してしまえば、精神はここで示されているような超越性を感じることができないのではないかということである。肉体があるからこそ精神はその超越性を感じることができるのではないかということである。また内と外の区別も、とりあえずは肉体が基準になっていることから考えると、果たして一体感をもたらすことができるのだろうか。つまり「私」はどこにあるのかとか、現実はどうのように定義されるのかという問題について、「私」には肉体があること、現実には「私」の思っているようには機能しないというように何らかの抵抗があるということから、逆説的に存在論的に明らかになるのではないかということである。つまりここにあるのは否定の否定であって、否定された肉体=物質が精神化されることによって再びよみがえるということなのだ。そしてここにおいてグノーシス主義の言う救済、真の知識を得ることで至高の存在へと至ることが可能となるだろう<sup>4)</sup>。

## 注

- 1) 本文中にある引用部分の後もしくは参照箇所として括弧付きで記されている略記号は以下の文献を表わす。下線部分は原文ではイタリック体であり、原文で大文字表記は [ ] で表わし、引用記号 guillemet はそのまま使用した。

(PI) André BRETON, *Œuvres complètes I*, Pléiade, Gallimard, 1988

(PII) André BRETON, *Œuvres complètes II*, Pléiade, Gallimard, 1992

(PIV) André BRETON, *Œuvres complètes IV*, Pléiade, Gallimard, 2008

(PS) Ferdinand ALQUIÉ, *Philosophie du surréalisme*, Flammarion, 1977

(SP) Charles BAUDELAIRE, *Le Spleen de Paris*, Librairie Générale Française, 2003

(LH) Alexandre KOJÈVE, *Introduction à la lecture de Hegel*, TEL, Gallimard, 1947

(AO) Gilles DELEUZE et Félix GUATTARI, *L'Anti-Œdipe*, Minuit, 1972

(MP) Gilles DELEUZE et Félix GUATTARI, *Mille Plateaux*, Minuit, 1980

(TR) Marcel PROUST, *Le temps retrouvé*, folio, Gallimard, 1954

- 2) このアヴィニオンはヴォクリューズ県の県庁所在地で、ナジャが狂気に陥ってヴォクリューズの精神病院に入れられたことから結局ブルトンはナジャを目指していたのではないかとも思われるが、ナジャが入院させられていたヴォクリューズの精神病院とは、当時パリ地区にはあったのだが、エビネーシュル・オルジュにあるペレ・ヴォクリューズという病院で、現在ではエソンヌ県ということになっているので、南フランスにあるヴォクリューズ県とは関係ないのだ。
- 3) ここにおいて確認しておかなければならないのは、我々が日本語で使用している幽霊という言葉はフランス語では様々に表現されているが、『溶ける魚』においても『ナジャ』においても *fantôme* という語であるということだ。
- 4) ルイ・アルチュセールは哲学することの狙いは、単なる作り話にすぎないイデオロギーの欺瞞的な哲学を批判することだとしている。これは自分自身惑わされたいめというところでもあるだろうし、哲学を明らかにすることによってその考えを世間に広めて騙されないようにしようと呼びかける意味もあるだろう。アルチュセールの考えが真実かどうかは別にして、正しく認識することによっていくつかの考えられる行動の選択肢として少なくとも間違ったことはしないでいられるということは可能になるのだ。ところがこうすべきだの前提としてこうあるべきだというのがあって、その実現のために自分としてはすべきことはあるのだが、それでは十分ではなく他の人たちの力も借りなければならないということで、世間に呼びかけるという試みは成功するか。ここにおいてその理論が正しいかどうかは問題ではない。肝心なのは、それが他の人々の現実界を刺激することができるかどうかだ。つまり実際には現実とこうあって欲しいと思う欲望との間には距離があるということであり、その欲望に叶うなら実現は可能だろうが、そうでなければいくら正しくても実現は難しいということになってしまふ。『ナジャ』のテキストを支えているものは、確かにそこに示されているものは現実のものでありながら、ある種幻想的で実体を欠いた欲望なのである。『ナジャ』のテキストの中には数多くの写真が添付されていて、この物語が事実であることを証拠立てるのに十分なのであるが、これは『ブレードランナー』の中である女性のアンドロイドが自分はアンドロイドではなく人間であり、その証拠にここに両親の写真があると見せ、かつ同時に子供時代の思い出話も語ってきかせるのであるが、実はそれは後から植え付けられた記憶であることが語られることに似ている。現実と実はそうあって欲しいと思っている現実との間の距離はこのように維持されるのであって、それを可能にするのは欲望なのである。現実にある美しい風景を見てまるで絵のようだと表現し、現実に起きたあり得ないことの実現をまるで夢のようだと表現することの逆転があるのだ。ここで価値があるのは現実なのか、夢なのか。『ナジャ』のテキストが要求する読解は、夢の世界が現実の世界とは別個の形で存在し、夢とは現実にあり得ないことのように思うのではなく、夢のような出来事が現実に入り込んでくることによって、現実が今までの枠の中で捉えることができなくなるということである。悪い夢にうなされて夢から目覚めるのは、夢から現実への逃避だとラカンが言う時、夢の世界は夢のようだという表現にあるように安楽で快適な世界を意味しているが、場合によっては逆のこともあり、その場合現実の方がまだまだと考えることではなく、この恐ろしい夢というのは考えてみれば現実においても何度となく体験させられたものであって、既に十分現実的なのである。シュルレアリスムが向かうところは、主体が同一化してしまっているこの現実界の所在とその解明にあるだろう。

